

Web 配信と学会カルチャー

長田 道夫*

新型コロナにより多くの学会が Web 配信になった。ちょうど今年、腎臓関連の学会を主宰する予定だったが早々と完全ライブ（Web 配信のみ開催）にした。終わってみると確かに立体感のないイベントではあったが、これまでの学会文化が変わる予感を残した。

Web 学会最大の利点は、会場まで出かけなくても個室最前列で明確に視聴できることだ。確かに頭への入り方がまったく違う。会場を渡り歩くことも容易だし、複数の会場をパネル化して裏番組を同時に聴取できるなんて簡単だろう。もちろん、日程が被った複数の学会にも同時に参加できる。専門医の単位取得講習会の長蛇の列に並び講習を聞きそびれることや、講習会開始とともに会場のドアを閉め退出を遮る、などの嘆かわしいアナログ作業も Web 学会ではなくなる。こう書くと参加側にはいいことづくめであるが、主宰や発表側には別の事情もあるだろう。

学会会場での録画録音、写真撮影は禁じると喚起されて久しいが、今でも盗撮のような挙動と同時にスマホのあの“ガシャ”という音を聞くことがよくある。面白いことに一人が始めると伝染する。単純なマナーの問題だが、会場と公衆という、かろうじての抑止力が Web 個室では効かない。教育プログラムならまだしも、未発表データを織り交ぜた議論の場をいくらかでも録画複製でき、だれの手へ渡るかもわからないことに用心したプレゼンでは議論の質はおのずと低下する。発表や出版倫理を広く啓蒙しても限界

* 筑波大学医学医療系

はあるから、未発表データを含む深い議論はより face to face になるように思う。学会は興奮しないイベントになるのだろうか。

主催者側も変わるときがきたようだ。学会開催には莫大な費用がかかるが、これをランチョンやスイーツなどの企業セミナーで賄う慣わしは特殊である。Web 学会になれば、これらはなくなるだろう。一方で高額な会場費の心配はなく、国内外からの招聘にかかる費用も不要だ。学会のサイズやプログラムを予算から考えることがなくなれば、学術集会の輪郭をより明瞭にする、あるいはしなければならぬだろう。もう一つは学会主催に絡むインセンティブかもしれない。学会主催は名誉なことであるが、Web 学会では主催者としての古臭い旨味はさらになくなる。学会を主催する理由もおのずと変わり、開催の趣旨も明確になると期待する。若手であっても学会に大きな貢献はなくても、学術集会の意義を直視した姿勢でプログラムを考えるような度胸のある主催者が登場し、それを許す文化も面白い。

コロナは、学術集会が本当は便利で効果的であることを気づかせた。もう元へは戻れないだろう。それでも現地開催にはそれなりの意味があるようにも思うが、いったい何だろうか？